

12月定例校園長会にて

皆さん、こんにちは。

12月10日（月）のニュースで、東京都内の中学生が「いじめ」を理由に自殺するという痛ましい報道がありました。学校は、生徒の命を救えなかった力不足を謝罪しましたが、私たちにとって、「いじめ」の問題は対岸の火事ではなく、身近にある問題だということをしっかりと心に留めることが必要だと思います。

子どもたちにとって、「困っていたら助けてくれる。がんばったらほめてくれる。先生といると楽しい。」こんな先生がたくさんいる学校が、安心・安全な場所となります。教育だより『きらめき☆奈良』でも、「いじめ」についての特集を組んでいますので、それも活用しながら「いじめ」の問題については、今一度取組を進めてください。



■教員としての自覚を

12月定例市議会の中で、「先生方が、暴漢対策や避難誘導において、スリッパ履きで万全の対処が出来るのか。」という質問がありました。学校の危機管理についての質問ではありましたが、スリッパ履きだけでなく、服装などについても、やはりふさわしいものがあると思っています。

このことについては、昨年度の12月の校園長会で、中川政七商店の13代目社長、中川淳さんの「若い職人が、外で地べたにすわって弁当を食べていれば、私は叱ります。そんな職人が作った品物だとお客さんが思ったら、買ってくれないからです。」という言葉を用いて、どんなに良い教育を行っていても、教員の態度や雰囲気によっては評価を下げ、信頼が得られなくなることを話しました。

年度始めに県教育委員会が、新規採用教員に「新規採用教員のための常識ノート『はじめの一步』（県ディア・ティーチャー・プログラム・サポートオフィス作成）」という冊子を配布しました。冊子の冒頭に「この本は、皆さんより少し先に教員になった先輩方からのメッセージで構成されています。」とあるように、教職経験2～5年の若手教員からのアドバイス集になっています。その中に、「身だしなみ」という項目で、教員が留意すべき点について書かれ

「～新規採用職員のための常識ノート～『はじめの一步』より

5 身だしなみ

教師として、また社会人として、TPOをわきまえた身だしなみを心がけましょう。

- * 式典、出張、家庭訪問、参観、懇談など、その場に応じた服装をしましょう。
- * 体育や部活動など体を動かす場合は、ジャージや運動靴などの活動に適した服装を用意しましょう。
- * 不測の事態に備え、ロッカーにジャージ等を常備しておくとう便利です。
- * 災害や不審者への対応等、緊急時を想定し、校内では靴をはくことがおすすめです。サンダルでは急な動きはできません。

コラム5 ～身だしなみNG集～

公私の区別をしっかりとつけることが大切です。

- ・染髪
- ・長い髪（束ねましょう）
- ・派手な服
- ・厚化粧
- ・露出の多い服
- ・体のラインがくっきり出る服
- ・過剰なアクセサリー
- ・長い爪
- ・ジーンズ
- ・ジャージでの通勤

ています。「たかが服装のことで」というのではなく、「まずは、身だしなみから」という意識が大切です。このような社会人としての基本的なマナーについて、繰り返し校園長の皆さんに話すのは残念に思うわけですが、子どもや保護者から信頼され尊敬される教員となるように、各校園でよろしくをお願いします。

■晩秋に開催された大会や集会をふりかえって

11月から12月にかけて、本市の教育にかかわる大きな大会や集会が三つ開催されました。これらの行事についてふりかえりながら、私の思いを話します。

一つ目は、11月10日（土）に、富雄第三小中学校において開催された、「奈良市小中一貫教育研究発表大会」についてです。市内外の教員や市民422名、富雄第三小中学校の保護者449名、合計871名の参加がありました。大勢の参観者が来られ、廊下側の窓枠を外しての公開授業の中、大変熱気のある研究発表会になったと感じました。この大会の様子だけを見れば、奈良市の小中一貫教育はずいぶん浸透してきている印象をもちます。



その一方で、PTA役員との懇談会の中で、「小中一貫教育をしていると言うけれど、その姿が見えてこない。これまでと、何がどう変わったのか分からない。」という声も聞きました。小中一貫教育を推進しているパイロット校では、組織を作り、教員の研修も行って取り組んでいます。そのことが保護者の皆さんに伝えきれていない現状があるのだと思います。取組の様子や成果を地域や保護者の皆さんに発信することが大切です。小中一貫教育は、それ自体が目的ではありません。これを手段として、「教員を変え、学校を変える。そして子どもを変える。」という意気込みで取り組んでください。

二つ目は、11月17日（土）に開催された「子ども安全の日の集い」についてです。この集いは、平成16年に発生した奈良市小学生女子誘拐殺害事件の後、毎年開催されています。今年度は、校園長先生をはじめ、少年指導協議会の皆さんを中心にして248名の参加がありました。





当時、小学校1年生だった有山楓ちゃんと同級生は、中学校3年生となり、義務教育最後の学年となりました。こう考えてみると、今年の一つの節目の年でもあります。当時は、市内の道々で、子どもが学校に向かう後姿をずっと見守っているお母さんの姿をよく見かけました。奈良の街の意識も変わった

と感じたものですが、時が経つとともに、そのような姿はだんだん見かけなくなりました。しかし、今でも毎朝通学路に出て、子どもの安全指導をしてくださっている地域の方々や校長先生、教頭先生を見かけます。楓ちゃん事件を風化させず、子どもたちの命を守っていく取組として、頭の下がる思いでいっぱいです。今後も地域と連携して、子どもたちを、「地域で守り、地域で育む」取組を継続していくことが必要ではないかと改めて思いました。

校園長の皆さん、どうかボランティアの方々や地域の方々へ「ありがとうございます。ご苦労さまです。」と声をかけ続けて下さい。「ありがとう。皆さんのおかげで、助かっています。」という感謝のメッセージを送り続けることが、地域ボランティアの方々とともに安心・安全な学校をつくることにつながります。

三つ目は、12月2日(日)に開催された「なら教育の日」の記念集会についてです。この集会には、少年指導協議会や自治連合会など、市民の皆さん90名、PTA関係の皆さんが96名、教員97名など、合計346名の参加がありました。



私は、映画監督の河瀬直美さんと対談しましたが、以前河瀬さんが、「PTAの研修会で、指導主事の先生が、世界遺産学習の話をしてくれた。それを聞いて、涙が出るほど感動した。」と、おっしゃっていることを大変うれしく思っています。「映画監督」の河瀬さんが感動したのではなく、「PTA会員の子をもつ親」としての河瀬さんが、奈良市の取組を理解し共感してくださったことに喜びを感じているのです。

この時の河瀬さんとの対談の中で、言いそびれてしまったことを一つ、皆さんに伝えておきます。それは、平成21年に開催されていた「阿修羅展」に寄せて、河瀬さんが書かれた文章についてのことです。せっかくの河瀬さんとの

河瀬さんの文章「阿修羅展」に寄せて

奈良で生まれ育ったわたしには、興福寺五重塔はまるで自分の分身みたいに生まれたときからそこにあり、変わらぬ姿で今日もある。幼少のころのアルバムを見れば、興福寺の境内で養母とお弁当を食べている姿がある。土曜日、幼稚園の帰りに自分が降りなければならない紀寺のバス停で、“降ります”のチャイムを鳴らしてはいけないと言われると「ああ興福寺に行けるんだ」と幼い心が弾んだ。あまりにも近すぎてその価値を知らずきたけれど、2010年には創建1300年を数えるというから歴史は深く、幾重の人々がその伽藍に願いを込めて守り伝えてきたのだろうと考える。

今年は東京国立博物館と九州国立博物館へ阿修羅像が旅をなされ、たくさんの方々にその姿をお披露目になられる。人々は鑑賞物としてそのお姿を拝見するのだろうが、本来は祈りの対象である仏像。鑑賞後はなにとそ両の手を合わせてご縁をいただく喜びに打ち震えて欲しい。そうして生活の場が祈りの場として存在する稀有な町、奈良を来訪されたく思う。

対談でしたので、この文章を紹介して、「こんな思いをもつ子ども達を増やしていきたい」
ことをお伝えしたいと思っていました。毎日見慣れている当たり前の風景の中に、実は大切な
ものがあります。本物があります。奈良国立博物館の学芸部長である西山先生は、このこ
とを「もう、ある。」と、おっしゃっています。それが奈良の素晴らしいところです。その
「もう、ある。」ものを深く知り、学んでいく。そんな、奈良らしい教育、世界遺産学習を
進めていきたいと考えています。